

A scenic view of a turquoise lake reflecting snow-capped mountains and evergreen trees. The lake is calm, acting as a perfect mirror for the surrounding landscape. The mountains in the background are rugged and covered in patches of snow, with some rocky outcrops visible. The evergreen trees are dense and green, framing the lake and mountains. The sky is a clear, bright blue.

カナダの現代史

220781013 大重悠真

はじめに

-
- a) 米国・メキシコ・カナダ協定 (USMCA)
-
- b) カナダ銀行の金融政策
-
- c) カナダ産菜種の市場動向
-

a) 米国・メキシコ・カナダ協定（USMCA）

ア) 米国・メキシコ・カナダの自由貿易協定

イ) NAFTAを継承、2020年に発効

ウ) トランプ政権の関税措置

エ) USMCA体制の不安定化

b) カナダ銀行の金融政策

ア) 2025年9月、政策金利を2.5%へ低下

イ) 報復関税撤廃でインフレ圧力緩和

ウ) 2025年4～6月期GDPはマイナス成長

エ) 金融緩和で景気下支えを重視

c) カナダ産菜種の市場動向

ア) 2025年夏以降、キャノーラ油の価格が下落

イ) 中国が追加関税→影響

ウ) カナダ産菜種の輸出量が大幅減少

エ) 資源輸出依存の脆弱性が顕在化

第 I 章：カナダの成り立ち

第 I 節：カナダの概要

a) カナダの概要

ア) 北アメリカ大陸の北部に位置

イ) 気候は主に亜寒帯気候

ウ) 面積は約**998.5**万平方キロメートル

エ) 人口は約**4010**万人

b) 地理と地域構成

ア) 国土は5つの地域に分類

カナダ楕状地・ハドソン湾低地

西部山岳地帯・大平原地帯・アパラチア高地

イ) 森林や湖が多、水資源が豊富

ウ) 西部では石油・天然ガスなど資源開発が繁盛

c) 言語と文化

ア) 公用語は英語とフランス語

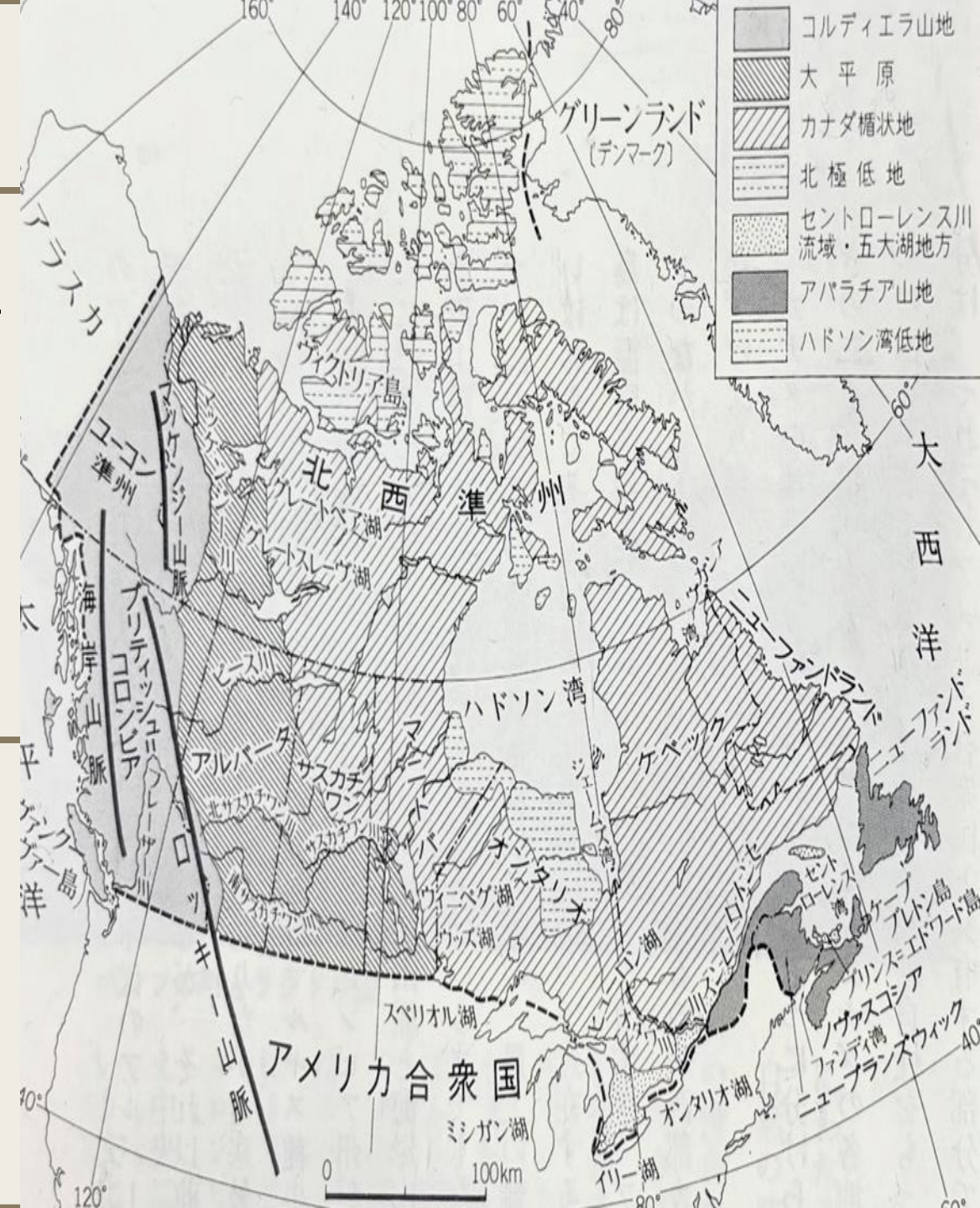
英語話者：約**63.7%**、

フランス語話者：約**20%**

イ) 多民族・多文化国家

キリスト教、イスラム教、仏教

ヒンドゥー教、シク教



第Ⅱ節：カナダ政体の仕組み

a) カナダの政治体制

ア) 立憲君主制・議院内閣制・連邦制の三原則で構成

イ) イギリスの自治領として発展

ウ) 国家元首はイギリス国王で、総督が代理を務

エ) 総督は儀礼的・象徴的役割 任期は3年から6年

b) 議会制度

ア) 議会は二院制（上院＝元老院、下院＝庶民院）を採用

イ) 上院議員は総督が任命、下院議員は直接選挙で選出

ウ) 下院は国民の意見を反映の役割を担当、上院よりも強い権限を有

エ) カナダの政治体制は、アメリカのような革命とは別長年の改正と制度形成で発展

第Ⅲ節：カナダの歩み

a) 先住民の時代

b) ヨーロッパ人の到来

c) イギリスの自治領として発展

d) 国家元首はイギリス国王で、総督が代理

e) 総督は儀礼的・象徴的役割

f) ロイヤリストの移住と植民地の分割

g) 自立への道

h) カナダ連邦の成立

i) 第一次世界大戦と自立意識の上昇

j) バルフォア報告書とウェストミンスター憲章

k) ブリティッシュ・コモンウェルスの成立

a) 先住民の時代

ア) 東アジアからベーリング海峡を利用 北米へ移住

(約1万年以上前)

イ) 寒冷な気候の元で多様な文化を形成

自然と共存、社会を構築

b) ヨーロッパ人の到来

ア) ヨーロッパ各地で海賊行為→ヴァイキング

北アメリカに到達（最初のヨーロッパ人）

イ) 1492年にコロンブスがアメリカ大陸到達

ヨーロッパ諸国の新大陸進出が本格化

c) フランスの植民活動

ア) 17世紀初頭 鱈漁業・毛皮交易を目的に植民地化

イ) 北アメリカ大陸にアカディア→植民地を建設

ウ) アカディアが中心、ヌーヴェル・フランス

(新フランス) として発展 都市モンリオールが建築

d) 英仏戦争とアカディア追放

ア) 1755年から英仏でアカディア領有強奪戦

イ) ケベックがイギリスの支配下として確立

ヌーヴェル・フランス崩壊

ウ) フランス人→アカディアの住民

ヌーヴェル・フランスから強制追放

e) 米国独立戦争とケベック法

ア) 1774年 ケベック法

カトリック信仰やフランス系慣習が保障

イ) 英仏戦争の戦費を確保、結果

イギリス本国が植民地に重税や貿易の制限

13植民地側が反発したことが原因で勃発

f) ロイヤリストの移住と植民地の分割

ア) 米国独立でイギリス忠誠派（ロイヤリスト）は
イギリス植民地のケベックに移住

イ) 1791年「カナダ法」で、ケベックが

フランス系住民の多いロワー・カナダ

イギリス系住民の多いアッパー・カナダに分割

g) 自立への道

ア) 米国が領土拡大でケベックへの脅威増大

イ) 1841年にアッパーカナダとロワーカナダが統合

連合カナダ植民地成立

ウ) 1848年に連合カナダ植民地に責任政府が認証

h) カナダ連邦の成立

ア) 1867年「英領北アメリカ法」施行

イ) オンタリオ・ケベック・ノヴァスコシア・ニュー・ブランズウィックの4州が統合

ウ) 首都オタワ、連邦体制を採用

エ) 外交・憲法権限は依然イギリスで不完全独立

i) 第一次世界大戦と自意識

ア) 1914年にイギリスの宣戦布告で自動参戦

イ) 約63万人が従軍、国際的評価を獲得

ウ) パリ講和会議で独自代表権を獲得、国際連盟の原加盟国

j) バルフォア報告書とウェストミンスター憲章

ア) 1926年にバルフォア報告書

イギリスと自治領は「対等な関係」と定義

イ) 1931年にウェストミンスター憲章

バルフォア報告書を法的に確立

ウ) カナダは政治・外交上、事実上の独立国

k)ブリティッシュ・コモンウェルスの成立

ア) イギリスと自治領が「王の下で平等な関係」で協力

イ) 垂直的支配（帝国）から

水平的協調（コモンウェルス）体制へ転換

ウ)カナダの国際的地位が大幅に強化

第Ⅱ章：第二次世界大戦から独立まで

第Ⅰ節：第二次世界大戦とカナダ

a) 戦間期のカナダ

ア) 第一次世界大戦後、経済回復と都市文化の発展

イ) 女性の社会進出、1921年に初の女性議員が誕生

ウ) 一方で、農村では小麦価格の下落や不況が深刻化

エ) 都市部では失業率上昇・労働運動の活発化

b) 第二次世界大戦への参戦

ア) イギリスが9月3日に宣戦布告

カナダは独自判断で9月10日に参戦

イ) 外交自主権を確立

独自に決定点が存在、第一次大戦と別

ウ) 「自由と民主主義を保護」という理念で参戦

c) 戦時経済と社会への影響

ア) 軍需産業の拡大で完全雇用を達成

イ) 戦略物資の輸出で不況を脱出、国民総生産は戦前の約2倍に上昇

ウ) 空軍訓練施設で多くの兵士を育成、ヨーロッパ戦線で重要な役割を達成

第Ⅱ節:戦後の自治と社会制度

a) 政治的自立の進展

ア) 1947年「カナダ市民権法」により、初めて「カナダ市民」が法的に定義

イ) イギリスからの独立志向と独自外交の確立が明確化

ウ) 「イギリス臣民」枠組みは一部残存
形式的な関係は継続

b) 社会保障制度の拡充

ア) 連邦政府と州政府の協調体制

国的な医療保険制度が整備

イ) 1960年代後半には、年金法・扶助法・医療保険法が整備、社会保障が体系化

第Ⅲ節:1960年に制定のカナダ権利章典

a) カナダ権利章典の制定と内容

ア) **1960**年、カナダ連邦議会が「カナダ権利章典」を制定

イ) 生命・自由・安全・財産の享受を保障

ウ) 信仰・言論・報道・集会などの自由を明文化

エ) 人種や宗教差別の排除を目的

民主主義の基本原則を確立

b) 限界とその後の影響

ア) 適用範囲は連邦のみで、州には無効

イ) 憲法の非一部、法的拘束力が限定的

ウ) 1969年の公用語法制定で英仏両語が公用語化1971年に「二言語主義の枠内での多文化主義」を宣言

エ) 限界は存在したが、人権保護の出発点として重視

多文化社会を尊重し国家方針の基礎確立

第Ⅲ章：1980年から2020年代のカナダの政治

第Ⅰ節：1982年憲法の制定

a) 憲法体制の特徴

ア) 1867年英領北アメリカ法（BNA法）が基礎

イ) 憲法改正権を獲得、政治的自己決定権の確立

ウ) 新たな最高法規として憲法施行

エ) 1982年4月、オタワで公布

b) 憲法の意義

ア) 権利と自由のカナダ憲章を中核に設置

イ) 表現・信教・平等・移動の自由を保障

ウ) 多様な国民を共通の市民的価値へ導引

エ) 真の立憲国家、独立を象徴

第Ⅱ節：NAFTA発効からの貿易

a) NAFTAの成立と効果

ア) 1994年、カナダ・米国・メキシコで発効

イ) 関税撤廃と投資自由化

ウ) エネルギー・農産物輸出が中心

エ) 経済主導権は米国側

b) NAFTAの評価と課題

ア) 米貿易依存度が50%超

イ) 輸出入の拡大成功

ウ) 多角的貿易戦略の必要性

エ) 所得格差や人材流出

第Ⅲ節：1990年から2020年代の政治

a) 1990年代の外交転換

ア) ソマリア事件で信頼低下

イ) 対人地雷禁止条約を主導

ウ) NGOと協働、120か国超が参加

b) 人間の安全保障外交

ア) 人間の安全保障が外交の柱

イ) 国際刑事裁判所設立

ウ) 子どもの権利保護

エ) 保護する責任の普及

c) 2000年代以降の変化

ア) イラク戦争への不参加

イ) 多文化主義の強化

ウ) 大麻合法化

エ) アジア太平洋との連携強化

第IV章：現代カナダの諸問題

第 I 節：気候変動と環境問題

a) 気候変動の進行

ア) 最終氷期後に現在の気候が成立

イ) 1920年以降の温暖化は人為起源が主因

ウ) 1948～2016年で平均気温1.7度上昇

エ) 降水量は約20%増加

b) 自然環境と社会への影響

ア) 海氷減少でホッキョクグマ・アザラシが減少

イ) 永久凍土融解で温暖化加速

ウ) 移動・生活様式への打撃

エ) 経済的利益と環境破壊の両立が課題

c) 政府の対応と政治的対立

ア) パリ協定参加

イ) 炭素税制度の導入

ウ) 排出削減目標

エ) グリーン投資と雇用創出を推進

第Ⅱ節：先住民族や移民の課題

a) 先住民族の現状

ア) 都市部への移住が進展

イ) 住宅・雇用・健康問題

ウ) 若者の自殺や女性への暴力

エ) 都市型先住民文化の形成

b) 移民政策の発展

ア) 人種・出身国に非依存で選抜

イ) 多文化社会の基盤を形成

ウ) ポイント制の導入

エ) 年40万人超の移民

c) 多文化社会の課題と評価

ア) 労働人口拡大の主力

イ) 生活費高騰や保守層の反発

ウ) 比較的弱い反移民感情

エ) 共生が重視の社会風土

第Ⅲ節：カナダとアメリカの対立問題

a) 同盟関係の形成

ア) 軍事・安全保障協力

イ) 自由民主主義と市場経済

ウ) 戦後秩序の安定要因

エ) 国力差が潜在的緊張要因

b) 協調と対立の歴史

ア) 核兵器の導入問題

イ) 首脳間対立

ウ) NAFTA発効

エ) 紛争処理

c) 近年の対立激化

ア) トランプの「51番目の州」発言

イ) 追加関税と報復関税

ウ) 主権尊重を強調

エ) USMCA再交渉

今後の展望

-
- a) 多文化共生主義を支持の立場
-
- b) 多文化共生主義への批判的立場
-
- c) 多文化共生主義支持の理由
-

a) 多文化共生主義を支持の立場

ア) 異文化・価値観の尊重

イ) 社会の活力と柔軟性の理念

ウ) 民主主義・人権理念との親和性

エ) 多様性が前提の社会統合

b) 多文化共生主義が批判的の立場

ア) 共通の規範や帰属意識の弱体化

イ) 民族と文化の分断拡大懸念

ウ) 言語・生活習慣の違いで対立

エ) 社会不安が上昇

c) 多文化共生主義支持の理由

ア) 歴史的経緯と現実の社会構成

イ) 多様性を非前提の統合は困難

ウ) 問題の原因は制度や姿勢

エ) 対話と調整の必要性